

なな山だより

なな山緑地の会会報 第21号 2011・1

柴田さんとその仲間の植物観察会がなな山で開催されました

10月19日(火)、グリーンライブセンターで講師をされている柴田さんと植物好きの仲間15人が、なな山緑地に植物観察に訪れました。高木会長の挨拶の後、広葉樹の森と常緑樹の森を比較して見ることができるので、西の谷から西の山を越して中の谷へ降りるルートで、高木さん、相田さん、中原が案内しました。

花の少ない季節でしたが、西の谷にはちょうど「キバナアキギリ」の花が咲いていました。また、西の山には大小のキノコがあらここちに出ていました。大きな白いキノコは「ドクツルタケ」かも、との声。相田さんが図鑑で調べてみると、猛毒で、欧米では「死の天使」という異名をもつということでした。みなさんメモしたり、写真を撮ったりしていました。



中の山では、道がふかふかしていることに驚き、真っ赤に色づいた「ゴンズイ」の実に、歓声があがっていました。

柴田さんは植物に詳しく、中の谷入口では新しい植物「コブナグサ」を見つけて下さいました。

みなさんすっかりなな山が気に入ってしまったようで、来年の4～5月にはまた見学に来たいとのことでした。「是非、来てくださいね」。(中原記)

<写真>上=観察会のメンバー 下左=ドクツルタケ 下右=ゴンズイ



ごあいさつ

あけましておめでとうございます。平成23年を迎え、山のボランティアもいよいよ9年目となりました。

昨年は、恒例通りたくさんの子供たちが山を訪れてくれました。また、多くの仲間が新たに加わるという嬉しいニュースもありました。作業自体に大きな変化はなく、事故や怪我にもみまわれず、平穏な年だったといえましょう。7～9月には猛暑が訪れ、とくに8月は酷暑のため、水不足と害虫に悩まされました。また、当山ではなかったものの、ナラ類の立ち枯れも全国で見られました。そして、多量の水を必要とするサトイモは、残念ながらほぼ全滅でした。しかし反面、9月後半から多くの雨が降ったため、ナメコが過去最高の収穫となり、シイタケも豊作で、秋は再び豊かな実りに恵まれました。大自然の営みと生命力を前に、人間の力とは微々たるものだなあと、つくづく実感させられた一年でした。

今年は管理地がやや増えることが予想されますが、事故・怪我に十分注意しながら、仲間と共に、引き続き大自然との対話や探究を楽しんでまいりましょう。今年も、会員のみなさま、地域のみなさま、そして行政のみなさまのご理解、ご協力をお願いし、新年のごあいさつとさせていただきます。

2011年1月

なな山緑地の会 会長 高木 直樹

今年も子供たちの元気な笑顔が一杯でした 「雑木林で遊ぼう2010」がなな山で開催されました

2010年12月19日(木)、多摩第2小学校の「おやじの会」主催の「雑木林で遊ぼう2010」がなな山緑地で開催されました。朝から快晴、8時半前からおやじの会のメンバーが集まってお昼の食事の準備やテント張りの手伝いをしてくれました。10時になると子供たちが整列してやってきました。

午前中は、主に丸太切りと工作に取り組みます。事前におやじさんたちが伐倒して準備した丸太をのこぎりで切りますが一年生くらいの子供たちの力では大変です。それでも一所懸命切ると歓声をあげていました。工作では、ぶんぶんごま、鉛筆のアクセサリ、枝の自動車、中には剣や薙刀を作る男の子もいました。お母さんたちが黒文字の枝から爪楊枝を熱心に削っている姿が印象的でした。



お昼のお弁当のとき、お母さんたちは豚汁を、おやじさんたちはダッチオープンで鶏と野菜を蒸し焼きにして配ってくれました。私たちなな山のスタッフも頂きました。

午後からは、山に入り、カブトムシの幼虫採取、ハシゴ昇り、落葉掻きの恒例イベントに加えて、今年から、枝に掛けたロープにぶら下がるターザンごっこ、箕(み)をそりにして滑る落葉すべりなど盛りだくさんの遊びに子供たちは熱中していました。落葉滑りの終点で飛び込む落葉溜めが即席の落葉のプールになり、次々と飛び込んでくる仲間に落葉をぶっかけ、かけ返されて、はしゃぎまわる子供たちの声が響いていました。



2時半頃、いつまでも遊んでいたい様子ですが、「また、来年必ず来ます。ありがとうございました！」と元気にあいさつして帰って行きました。



今年は、昨年と比べると参加人数はやや少なかったものの、その分、内容の充実したイベントになりました。特に印象的だったのは、お父さん、お母さんが童心に帰って子供たちと一緒に楽しんでいる姿でした。ダッチオープンで料理するお父さんたち、黒文字で楊子を削るお母さんたちは自らが楽しんでいるように見えました。考えてみれば「おやじ」といっても、私の息子の年代であり、子供たちは孫と同じ年齢です。こうして、雑木林の中で楽しく遊ぶことが、里山の自然の大切さを次代、次々代へ伝えていくことに継がるのだということを実感した一日でした。(鎌田記)

<写真>右上=落葉掻き、左上=工作、右中=ハシゴ昇り、左中=丸太切り、下=集合写真



生物多様性と雑木林

2010年は国際生物多様性年といわれ、10月には生物多様性に関する国際会議（COP10）が名古屋で開催されました。国内だけではなく、世界的な規模で論じ合うこの会議は、人と自然の関係性にも関わる重要な会議となることが期待されました。この会議のキーワードは、1）保全 2）持続可能な利用 3）遺伝資源利用で得た利益の公平な分配でした。議長国日本としては一定の取りまとめを成し遂げてはいますが、ヒト目線での生態系のサービス(生物多様性がつくる生態系のはたらき)という考えを前面に出しています。人間中心では、ヒト・生き物の対等な共生関係という考え方からは程遠い、私としては納得のいかない国際会議であり決議でした。

ところで、生物多様性とは何かを少し考えてみましょう。

人間社会を含む地球という自然界は、いろいろな形の進化・競争を経ながら歴史を刻んできており、現在もその途上であるといえます。ある一定の周期を繰り返しながらも、長短の周期を織り込み、生き物同士が微妙ではあるが、緊密な関係を維持しているのです。その複雑な関係性の中に人間も位置していることをしっかりと認識することが大切です。

動植物すべての生存に不可欠なもの、それは人間社会という「衣食住」ではないかと思えます。

あらゆる動物の世界では、「食」は餌であり、微生物から鳥類、哺乳動物まで食物連鎖といわれる「喰うか喰われるか」の生活があります。「住」は住处であり、隠れ家でしょう。特に子孫を残すこと、子どもを安全に育てられる場所があることが最も重要なことでしょう。「衣」は羽毛や毛皮をすぐ思いつきますが、生物全体では自然環境がもっと重要な要素のように思われます。それは土であり、木の葉であり、水であって、そして何より温度・湿度・空気を伴う気候であり、太陽光でしょう。

それでは植物ではどうでしょう。植物の「食」はまず太陽光と空気（CO₂）と水です。それと土と養分が考えられます。「住」は大地でしょうか。その他、他のものに寄生したりするものもあり、これは微生物にも同じことがいえます。植物は大地に住まったらもう自力では移動は出来ません。子孫を残すため、住まいの範囲を広げるには、風・雨、昆虫・鳥・獣の助けを借りて、種子や胞子を生育地に運んでもらわなくてはなりません。そのために実の色・香・甘味など、風の助けを借りるための羽なども用意します。それでは「衣」は何でしょう。樹皮が該当する場合がありますが、あまり有効な働きをしているとは思えません。やはり気温・湿度・風・太陽光ではないでしょうか。

これらの「衣食住」にそれぞれ適した生物は生存率が高いと考えられます。これら「衣食住」の種類と組み合わせが多いほど生物多様性が豊かだといえるのではないのでしょうか。

雑木林の生物多様性を考えてみると数多くの状況があることに気がきます。長い間、里人が薪炭林として関わってきた整った樹木年齢の若い雑木林、人の関わりが手薄になり常緑の広葉樹がかなり茂ってきた雑木林、そして放置されっぱなしで見た目にも荒廃したような林、それぞれには共通の生物もありますが、その状況に適合した固有の生物も多いのです。従って、生物多様性という観点から雑木林をどう維持し、どう管理するかはそこに関わる者の立つ位置によって、その数だけやり方があると考えられます。



気候の変動と生物

これまで幾度となく述べてきたことですが、関東周辺の雑木林はやや北方気候に適する落葉広葉樹のコナラ・クヌギが中心植生でした。そして手入れのされていない雑木林は、比較的温暖な土地に成育する常緑の広葉樹が大変多くなってきました。このことが温暖化の原因になっているとは思いません。いうまでもなく放置された林は、人が創り上げた林から本来この地方にあった植生に移りつつあるということが現実に生まれているということですから。

温暖な地方に成育するチョウやセミが北上している状況を最近よく耳にし、目にします。愛好家も報道機関も、それらの現象を気候の温暖化のためと結論付けたような物言いをして、当事者もそれを聞く側も何故か納得してしまい片付けられてしまいます。

もっとよく現象を調査しなければならないと思います。それらには多くの場合、人為的な原因が隠されているということを知る必要があります。

クマゼミは南方性のクスノキの移植とともに幼虫が運ばれているということです。東京近郊には大量に植樹されています。西日本に多いツマグロヒョウモンは幼虫の餌であり住処であるスミレ系のパンジーについて運ばれているそうです。この辺りでも大変多く見られるようになりました。

また逆に生存の南限を超えて、本来もっと寒冷な気候を好み、この辺りには成育しているはずのないサケが最近、多摩川に遡上しているのが見つかったそうです。これも気候変動の影響とは全く関係ありません。10年以上前から、流域の小学校では毎年サケの稚魚を放流しているのです。誰がどのような意図で仕掛けているのかわかりませんが、生態系に反することで好ましいとは思えないのです。それとも多摩川の生物多様性に1種加わったと喜ぶべきでしょうか。



気候の変動は過去にも何度となく繰り返され、寒冷化した時もあれば現在よりはるかに温暖な時もありました。生物はその都度変化に耐えながら、少しずつ自らを気候変動に対応すべく変化させて、生命を維持してきたのです。自然界の生き物は、最適条件だけで成育すると

は限らず、条件不利でもそれなりに順応していくのではないのでしょうか。

もっとも、現在の気候変動は過去に経験したことの無い速さで進んでいるといわれます。だからこそ、対応できない問題が発生し、危険性が高いというのです。しかしそれも、もう少しきちっと精査してみる必要があるように思われます。

CO₂と雑木林

気候温暖化の原因はCO₂が大気中に増加して温室効果を起こしたものとされています。CO₂の増加は石炭、石油、天然ガスなどの循環しない化石燃料を地中から掘り起こし大量に使うことにより引き起こされているものです。大気中の水蒸気を見れば大変小さいCO₂だけが原因と考えるのにはおおいに無理がありますが、ここでは大勢に従っておきます。

CO₂の発生を少なくしよう、発生したCO₂を減少させる方法はないか、これが今、世界中の関心事です。

雑木林や、植物世界にこの解決策の一端を見ることが出来ます。先に少し触れましたが、植物の生活条件の中にある「食」に注目してみましょう。植物は空気中のCO₂を取り込んで成長します。そして薪炭や木材に利用されます。あるいは枯れて微生物により分解されて土に戻ります。いずれの時もCO₂を発生させますが、成育時の取り込みと相殺され、差し引きゼロとなります。大気中のCO₂の濃度は変わらないのです。このことをカーボンニュートラルといいます。

この植物の生態を上手く使ってCO₂を削減しようというのが、地球温暖化防止の国際会議（京都議定書）で、日本に課せられた削減目標の半数近くなのです。樹木（森林）の管理・育成により削減目標を達成しようということです。

すなわち、樹木の生長が盛んな若齢期にはCO₂吸収は大変盛んで、老齢期になるとその活動は鈍ります。そこで老齢期の樹木を伐採し、若木を植えていきます。成長を促進する間伐等の育林管理を適正に行います。そして伐採された木は住宅用、家具用、土木構造物用として使います。木材に蓄えられたCO₂を出来るだけ長期間固定しておくのです。30年から50年、日本の古い建築や家具のように数百年から千年に及ぶこともあります。

雑木林の樹木も家具材、道具材としての利用は充分可能です。僅かな量かもしれませんが木工材としての利用もあります。薪、炭、肥料としての利用はカーボンニュートラルであり環境の変化に対する影響は無視できるのです。しかも炭だけを取り上げてみると、木炭はまさに炭素の固体そのものです。したがって、木炭として長期貯蔵することにより、あるいは大規模な木炭貯蔵を地下などに考えた場合、永久的なCO₂固定となりはしないのでしょうか。

多様な雑木林管理

身近な雑木林に目を向けてみましょう。比較的若い落葉広葉樹の林では、林床には季節の草花が咲き、野草がそこそこに繁茂します。ここには年間を通して、人々の暮らしに結びついた手入れがなされます。下草刈りや落ち葉掃きが行われてきた場合は、落葉広葉樹は太陽を求めて上へ上へと幹を伸ばし、径の太い背の高い林となっていきます。

それは整然とした、たくましい林と感じられます。この林を若返らせるためには強度の伐採を行う必要があります。しかし現状を肯定し、このまま維持していきたいという思いも出てきます。

一方、50年以上全く手を加えられていない林もあります。アカマツは枯れて倒れ、常緑の広葉樹が大勢を占めてきています。他にはない植生があったり、生物の隠れ家にも利用されたりしています。微生物の成育状態は非常に多様であろうと思われます。しかし足を踏み入れる余地がないほど乱雑な林床となっています。

雑木林を大雑把にくくると以上の形態がありますが、これに樹木、草本、鳥、昆虫、獣、微生物などの生態の多様性を考えると、その存在をどう活かすか、更に生態系を広げられるかを考慮すると、実にいく通りもの管理のあり方が生まれてきます。この管理のあり方というのはその雑木林のいき着く姿のことで、技術的なことをいっているわけではありません。

しかし、いずれにしろ、人は自然の中で心地よく生かされているということを、人も自然の一構成員であることを、忘れてはいけないと思います。

そのような思いを、雑木林との関わりの中で改めて考えてみたいものです。先祖から受け継いだ宝物を、後世に伝えていくという中継のランナーのような役目を、私たちは、今、担っているのではないかと思います。(完)



<写真>=なな山緑地の風景

《6ページよりつづく》

2010・10・10(日)小雨のち曇り/晴れ 気温25℃

朝は雨、でも徐々に集まり9人も揃う。昼には陽も差してきて良い日になった。参加者9人。

「作業」ドングリ拾い、林内植物観察、畑作業(ダイコン間引き、虫駆除、追肥、サツマイモ試し掘り、耕運作業)、下草刈り(西・中の山、道路沿い)。

「観察」見つけた植物=サイハイラン(葉)、キバナアキギリ、ノササゲ、ヤブミョウガ、ヤマホトトギス、ヒゴズミレの閉鎖花、ナンキンハゼ。

2010・10・24(日)曇り 気温18℃

サツマイモ収穫、伐採木の皮むき、だいぶ冷える季節になってきた(>_<)。参加者12人。

「作業」サツマイモの収穫、法面草刈り、柵修理用にスギ、ヒノキの伐採と皮むき、中の山の整理、植物養生、観察。

「観察」見つけた植物=ジシバリ、ヤクシソウ、ブタナ、センダングサ、アキノノゲシ、ナルコユリ。

2010・11・14(日)曇り 気温12℃

第9期GV講座卒業生の名黒さんが入会、大歓迎!ナメコが大発生、椅子を新調。参加者14人。

「作業」西の山下草刈り、落ち枝拾い、広場の丸太椅子を新調(伐倒した材を玉切りして広場に運ぶ)、刈払機、チェーンソーの整備、倉庫の片づけ、道路沿いの清掃(ゴミが多い)、落葉溜めの整理。

「観察」見つけた植物=リンドウの蕾、ワタの花。

○ナメコが大発生、久しぶりに自然の恵みをいただく、美味!(写真右)。



2010・11・28(日)晴れ 気温11℃



お久しぶりの仲間が続々復活参加されてうれしい一日♪、植物は秋で沢山実をつけていた。堆肥を入れる囲いがリニューアル(写真左)。

参加者16人。

「作業」シイタケの収穫、タマネギ苗の植付け、西の山、中の山、法面の下草刈り、古い堆肥囲いの解体、新しい堆肥囲いの作成、倉庫整理・備品棚卸。「観察」見つけた花(植物)=リンドウ、タイワンホトトギス、ヤブムラサキの実、トキリマメの実、ヒイラギ、コバノガマズミの実、ムラサキシキブの実、ベニバナボロギク。

2010・7・11(日)小雨/曇り 気温26℃

なな山だより20号配布。ジャガイモ収穫&ジャガバター試食。参加者16人。
「作業」ジャガイモ(メイクイーン、キタアカリ)収穫、何と約450個！(写真右)、広場草刈り、クヌギ苗床整備、法面草刈り、ジャガバターの準備、ネギ植付け、畑周辺の整備、水路掃除、リヤカー小屋の屋根の修理。
「観察」見つけた植物=オオバギボウシ、ヒメヒオウギズイセン、ヒヨドリバナ。



2010・7・25(日)晴れ 気温34℃ 暑い！

今日の注意事項は安全第一、ヘルメット着用を。暑いときに無理をしない。自分の体とよく相談しながら活動すること。参加者15人。
「作業」林内散策(西→東)、畑の手入れ、倉庫整理、ログミルで板作り、道路沿いの整備、機の修理。

「観察」見つけた植物=アキノタムラソウ、ヤマユリ、エビヅル、ヒヨドリバナ、フタリシズカの閉鎖花。



2010・8・8(日)曇り 気温30℃

ここ数日の暑さと比べると若干涼しい日。夕方からは久しぶりの雨。参加者13人。

「作業」西の山の下草刈り、サトイモ水やり、キャベツの整理と跡地の耕し、施肥(写真左)、テーブル修理、

中の山の下草刈り、道路沿いの整備。

2010・8・22(日)晴れ 気温33℃

暑い一日。参加者は少数ながら精鋭。参加者11人。
「作業」カボチャ収穫、ダイコン用の畝立て、耕運作業、広場・西の山・中の山の下草刈り、テーブルの修理、林内の植物観察、チェーンソーのメンテナンス。
「観察」見つけた植物=ヤマイモ、シラヤマギク、クサギ。



2010・9・12(日)晴れ 気温31℃

珍しいカボチャ(スクナカボチャ)大収穫♪今日も暑い、暑い日だった。参加者11人。

「作業」カボチャの収穫と畑の整理、ダイコンの種まき、西の山下草刈り。



○へチマのようにぶら下がっているのが「スクナ(宿儺)カボチャ」といって、飛騨高山の伝統野菜(写真右)なな山の畑の脇の木に這い上がって空中で実をつけた。

2010・9・26(日)晴れのち曇り 気温25℃

お休みの人が多い日だったが、お天気がよく、爽やかなきもちのよい一日だった。10/19に行われる植物観察会の下見に、グリーンライブセンター講師柴田さんが来山。参加者13人。

「作業」ダイコンの寒冷紗を剥がし、2畝に寒冷紗のトンネルをかける、雑草取り、中の山中央の階段修理、樹木の名札作り、西側法面の草刈り、樹木の名札取付け、チェーンソー整備。**「観察」**見つけた花=ヒガンバナ、クサギ、ヤマホトトギス、ゴンズイ、ショウキラン(写真左)。

《5 ページにつづく》

なな山だより 第21号
 発行
 発行責任者
 住所
 ホームページ
 編集委員

2011年1月9日発行
 なな山緑地の会
 高木直樹
 多摩市和田 1394-13
<http://www.geocities.jp/nanayamaryokuchi/>
 鎌田文雄・中原君代・戸谷恵麻

編集後記

明けましておめでとうございます。
 編集者の都合で21号の発刊が遅れましたことお詫びいたします。新年を迎え新たな気持ちで取り組んで参ります。これからも「なな山だより」をよろしく願います。K

